モスレムの子どもたちの今

小林　美実

私たちは、毎日テレビや新聞で世界中のニュースを見たり聞いたりしている。最近は楽しいニュースよりも、国の内外ともに気持ちが暗くなるようなものが多い。特に悲惨な戦いや争いが世界中のあちらこちらで起きているが、そのニュースを見るのが、一番つらい。犠牲になっている人々の中には沢山の子どもがいる。どうしようもない無力感におそわれる。私が何回も人形劇の仲間たちとボランティアで訪れたインドネシアも、あちらこちらで争いやテロが止まない。一九九八年の訪問の直前に危険地域とされ中止、現在も訪問できないでいる。バリ島だけには観光客が訪れていたが、ここもついにテロが起きてしまった。インドネシアをはじめ今なお混乱状態にあるイラク、パキスタンなどの多くがイスラム圏の国である。そのため、この宗教との付き合いが過去にあまりなかった日本では、残念なことに誤解する人や興味本位の見方をする

人もいる。イスラム教は世界三大宗教のひとつであり、地球上にはこの宗教を国教とする国や信者モスレムは多い。ここでとりあげるマレーシアもそのひとつの国である。

日本でもモスレムといわれるイスラム教の信者を見かけることが多くなった。ほとんどの人が日本で職を得て働くために来ている。その中には家族で来た人も多く、保育所や幼稚園に在籍する子どもも増えた。最近まで日本の社会ではイスラム教についてあまり知られていなかったし、関心を持つ人も少なく、あの葱坊主のような形のユニークな屋根と尖塔を持つモスクも、東京でさえ一つしかなかった。だからモスレムの女性や子どもたちが保育所などにやってきた時、生活習慣をはじめさまざまなことで摩擦が起きた。イスラム教の女性はその服装ですぐわかる。頭から手、足まで布で覆い、素肌をむき出しにすることはない。真夏の暑さの中でもその服装をしている。働く女性の中には、時により私たちと同じようにスーツやスカートを着ることがあるが、それでも頭をスカーフで覆っていることが多い。多神教のわれわれと違い、一神教でコーランに書かれている教えを生きることの規範として、敬虔な祈りを日々ささげながら生活する彼らには、「郷にいれば郷に従え」という日本の柔軟な、ある面では大変都合のよい考えはなじまない。アッラーの神に対する信仰心は驚くほど強い。私の知人はイスラムの聖地であるメッカを訪れることを、どこへ旅することより望んでいる。もう何回訪れただろうか。今日本の保育現場も他民族の多様な文化や生活習慣を理解しながら、その子どもたちを暖かく迎えることがあたりまえになった。やっと日本人も国際人になってきた、ということだろうか。それにしても、同じ一神教であるキリスト教に対しては、日本への伝来が早かっただけでなく、その熱心な布教活動や西欧の

▲初めて訪れた中国系の幼稚園の子どもたち

文化とともに伝わってきたことから、あまり違和感を感じていない。

実はイスラムの人々といっても、国、地域によってさまざまである。私の知るイスラムの人々はマレーシアの保育職にある人たちや子どもたちである。世界の三大宗教の中では一番新しい宗教であり（七世紀）、それまでに各国、各地域では当然人々は生活していたし、土俗的な、原始的な、あるいは他の宗教が信じられていただろう。だからイスラム圏になっても、生活習慣などの中にはそうした古くからのものが残ったりしているはず、それが同じイスラムの人々でも、国や地域によって多少の違いができた、と私は考えている。宗教に関すること、飲食に関することなどはどこでも同じだが、例えば、人の像や人形を否定しているイスラムでも、マレーシアは一部の人を除いて、子どもの遊びでは肯定している。しかも古くから簡単な人の形をつくって遊ばせていたという。子どもの人形遊

びについてよく理解しているようだ。

マレーシアは人口数二〇〇〇万人のうち、約六十五パーセント弱がマレー人、三十六パーセントが中国人、八パーセントがインド人である（朝日新聞、十月二十九日朝刊「強権と発展③」より）。しかし国教のイスラム教の信者であるマレー人の多くは農村地帯に住み、都市に住んで経済を握っていたのは、中国人だった。一九五七年に独立を宣言し、一九六五年に経済力を持つ中国系の人々が多く占めるシンガポールがマレーシアから分離独立してから、マレーシアはマレー人の商工業参加を促進するプミプトラ政策を進め、そしてその後一九八一年にはルックイーストをスローガンに国の発展をめざした。私たちは一九七六年からマレーシアに人形劇をもってボランティア活動を始めた。こうしてマレーシアのイスラムの人々との付き合いが始まったのだが、初めのうちは、複合民族国家について理解していなかった。最初に公演を依頼された幼稚園・小学校併設の大きな学校のよく躾けられて

▲２年目に訪れたマレー系の小学校の子どもたち。
人形劇の鬼の首が気に入って、大はしゃぎ

行儀のよい子どもたちや、建物、設備の整っていることに関心したものだった。翌年、マレー系の小学校での公演を依頼された。そこはゴムのプランテーションにある加工工場に隣接した校舎で、魚などが腐敗したような刺激臭が常にただよう中での公演だった。そして前年の立派な幼稚園が中国系で、マレー系は多くが郊外のこのような貧しい環境にあることを知った。しかし子どもたちは嬉しさや驚きを大変素直に表情や声や体でいっぱいに表した。初めのうち、マレー系の子どもたちは、このような素朴な気持ちの表現がよく見られた。

三年連続してマレーシア巡回公演をしながら、私たちはマレー系と中国系の違いや両者の間にある摩擦がわかるようになった。常に中立の立場を心がけた。日本の社会ではこのような気遣いをする必要が本当にないのか。そんな議論も仲間で交わした。

二年の間をおいて、マレーシア政府（当時の農務省。後に政府組織KEMAS）の要請で、一九八一年から農村の女性のためのトレーニングセンターで学生たちと寝食を共にしながらのワークショップがまず始まった。彼らがここで学ぶのは、自分たちの生活をいかに向上させるかであって、保育に関することもそこに含まれている。壁にはってある絵の説明をみると、病気になったらお医者さんにみてもらおう、食事の前には手を洗おう、排泄は便所でしよう、など基本的な生活習慣が大人向けに書いてあり、食器を日光に当てるなどの素朴な衛生教育も行われていた。私たちに課せられた人形劇も、劇をすることより、人形をつかってどんなに楽しい遊びができたり、みんなで仲良くなれたりできるかを考えさせ、自分たちで人形を工夫して作ったり、表現方法を考えさせたりした。しかしマレーシアの学生や先生たちには、まず人形をあつかうことの面白さをわかってもらうことで精一杯だった。連続してワークショップをするうち、非常に変わって

きた。勿論人形製作や操作に慣れてきた人たちもいたし、なにより行動が年を追ってスピーディになった。毎日五回のお祈りや、年に一度のラマダンの期間には日中絶食をすること、長袖ロングスカートに頭のスカーフ、などは変わらないが、積極的に行動し、あれほどこだわっていたティータイムさえも、私たちにはすすめても、自分たちは製作や練習や話し合いに熱中するようになった。二〇〇一年までには全国に四ヶ所あるトレーニングセンターをはじめ、各地に文部省のプレスクールやKEMASの幼稚園が立てられ、六十五パーセントの子どもが四、五歳から一～二年の幼児教育を受けるようになった。私たちが関係するKEMASの園には、そのうちの約三分の一の子どもたちが在籍している。今年中に新しい教育法が施工され、全就学前教育が国の定めるカリキュラムを基に行われるようになる予定であり、百パーセントの就園をめざし、今施設増を実施している。この三十年間の急速な

▲壁に数や文字がはってある保育室

▲現在の園児と先生。子どもたちは、ピンクの上衣に紺の長いスカート、先生達はボタン色や黄色のあざやかな色の服とスカート

変化には驚かされる。保育室にあるさまざまな教具、教材等も増え、壁にはってある展示物には、子どもの好きなキャラクター（その中にはポケモンもあった）や派手な色彩でかかれた「ことば・文字・数」を学習するものが目立った。マレー、英、中国、インドの四カ国語を教えるプログラムを子どもによって組まなくてはならないという。気がかりなことに、日本のフラッシュカードも紹介されているらしい。

子どもたちは変わっただろうか。園もきれいになり、子どもたちの制服もしゃれてきれいになった。女子は大人の女性と同じように手足をむき出しにしない。気がついたのだが、以前より先生たちの服装もイスラムの教えにのっとり、スカーフ、長袖の上着にロングスカートをきちっと着ている。モスレムであることの誇りを感じる。服などの色や模様が実に華やかになり、そこでも自分を主張しだしたようだ。なおマレーシアの女性は、中東の女性がよく着ている頭から

足先まで全身を覆い、目だけを出している黒や地味な色のブルカは着ていない。だから明るい印象をうける。たしかに先生たちはとても陽気で、流行のマレー・ポップスの音楽が聞こえると、すぐうれしそうに体をゆすりだす。アルコールは絶対に飲まず、豚肉も決して口にしないが、皆で陽気に戸外で食事をすることが好きだ。子どもの歌を歌う時も、実に楽しそうに歌う。楽譜をよんだり、音符を書いたりすることは全くできないが、いっぱいの笑顔で体をゆらし、遠慮せずに声もだす。だから子どもたちも先生と同じように歌うことが好きだ。しかし体を活発に動かすことには消極的である。熱帯の暑さで、昼間はできるだけじっとしていたいし、服装も活発な動作にむいていない。子どもたちはとてもシャイだが、それだけでなく、やはり動きが少ない。最近少し気になることを聞いた。やはり文字指導などの場面で下をむいたままの子どもを見かけるようになったという。この教育改革

▲おとなしく座って、先生のことばを待つ子どもたち。
ブルーの上衣のデザインがしゃれている

▲暑い戸外で遊んでいたイバン族の子どもたち

で、どのように変わっていくのだろうか。マレーシアのモスレムの家庭では子どもを大切に育てる。躾もゆき届いている。園でもお行儀がいい。でも長すぎるイスラムの説教の時に、おしゃべりをし出す。先生たちは、「小さい子です。あたりまえでしょ」と小声で言ってそっと笑った。マレーシアのイスラムのもつこのやわらかさが、子どもたちを優しく育てているように感じた。

昨年マレーシア・サラワク州（ボルネオ島）のロングハウスで有名なイバン族の村を訪問した。そこで十年ぶりの精霊信仰の祭りに参加した。この人々の現在の宗教はキリスト教だった。子どもたちは炎天下、土ぼこりをあげてとびまわって遊んでいた。

（宝仙学園短期大学名誉教授）